学 位 論 文 審 査 の 要 旨

		要　　旨
学位申請者	杉下（齋藤）暁子【論文博士】 （人間発達科学専攻　平成18年3月単位修得退学）	本論文は、介護保険制度下における在宅福祉の主要な柱であるホームヘルプサービスに焦点を当て、サービス利用者(高齢者)と提供者(ホームヘルパー)のサービスに対する認識や期待、また両者の認識のずれに対する調整過程の内実を質的データの分析にもとづき考察することを目的とした。インタビュー調査は東京のある区において、サービス利用者 12 名、サービス提供者 12 名、サービス提供者の所属事業所 5 か所の管理者もしくは現場責任者 6 名を対象として実施された。 本研究の主要な知見及び意義として、以下の 3 点が挙げられる。 第 1 に、従来の福祉サービス研究では、調査可能性という現実的な制約もあって、サービス提供者のみを対象とする場合が通例であったのに対し、本研究では実際にサービスを授受する高齢者とヘルパーをペアで調査したことで、ホームヘルプサービスにおけるケアの多元的なリアリティを把握することができた。それゆえ、第 2 に、サービスに対する高齢者とヘルパーの認識は、高齢者の介護度やインフォーマルネットワークの状況、またヘルパーの職業経験やケアに対する考え方により多様であることが確認できた。高齢者とヘルパーの間では程度差はあれサービスに対する認識のずれが生じており、それは高齢者もしくはヘルパーのイニシアティブにより調整が図られる場合がある一方で、調整されないまま放置される場合もあった。第 3 に、ヘルパーのケアに対する考え方や高齢者の意向との調整に対する態度は、かれらの個人属性や高齢者との相互行為の特性のみならず、所属事業所の組織特性によっても左右されていた。介護保険制度施行後に事業参入した NPO 法人などは、行政や社会福祉法人などの旧来型のサービス提供組織に比べ、ヘルパーの裁量的判断の幅をより大きく認めており、メゾ・マクロレベルの要因がミクロレベルの相互行為を規定しているさまが確認された。 本論文の審査会は、平成 25 年 5 月 20 日、10 月 2 日、12 月 12 日、平成 26 年 1 月 30 日の 4 回にわたりおこなわれた。第 1 回審査会では、上記のような本論文の意義は評価されたものの、①主要概念の未整理、②語りの文脈への配慮や位置づけに関する考察不足、③結論部分の議論展開の不足、などの問題点が指摘された。これらのコメントを受けて修正作業を続け、その後 2 回の審査会で順次修正状況を確認し、平成 26 年 1 月 30 日の公開審査会に臨んだ。公開審査会では、論文の概要報告が適切になされ、その後の質疑応答もおおむね満足のいく水準であった。このため、引き続きおこなわれた最終審査会では、全会一致で本論文は博士学位論文として合格水準に達しているとの結論に至った。 以上のことから、本審査委員会では、本論文を博士(社会科学)、Ph.D.in Sociology の学位を授与するにふさわしいと判断した。
論 文 題 目	ケアの関係性の再考　―高齢者とヘルパーの視点からみるホームヘルプサービス―	
審 査 委 員	（主査）　教　授　　藤　崎　宏　子	
	教　授　　平　岡　公　一	
	准教授　　杉　野　　勇	
	准教授　　小　谷　眞　男	
	准教授　　斎　藤　悦　子	
インターネット公表	○　学位論文の全文公表の可否（　可　・　否　） ○　「否」の場合の理由 ア．当該論文に立体形状による表現を含む イ．著作権や個人情報に係る制約がある ウ．出版刊行されている、もしくは予定されている エ．学術ジャーナルへ掲載されている、もしくは予定されている オ．特許の申請がある、もしくは予定されている ※　本学学位規則第２４条第４項に基づく学位論文全文のインターネット公表について	